
誰が為に

ユウサク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
誰が為に

【Nコード】
N5426F

【作者名】
ユウサク

【あらすじ】
なんとなく人生を楽な方楽な方に転がりながら過ごしてきた男『智雄』そんなかれの日常が少しずつ歪んでいく。

はじまりは・・・（前書き）

つまらない日常（仕事）から逃げ出したい！そんな思いがとどいたのか、彼の前にいるんな『非日常』が転がり込んでくる。

はじまりは……

二時間ぶりに見つけたコンビニの駐車場でやっと缶コーヒーにありつけた。

ブルタブを捻ってダイレクトにごくごくやる。喉が渴いていたのといつもの水筒（コーヒーが入った）を忘れてしまい、しかも……こんな田舎に来るのに途中で買っておかなかったのが悔やまれた。

現在地は……ナビをつけていないのでよくわからないが、おそらく宮崎県のどこかだ。

社内の他の連中は

「ナビがないと不便だろ!？」

だとか

「金借りてでもつけろよ!」

などと好き勝手ぬかしているが、スーパーマッブル一冊あれば大概の場所にはいけるし、なによりこの仕事自体、あまり長くするつもりもなかった。

片山智雄は福岡（九州の一番上）に住んでおり、会社の事務所も当然福岡である。しかし会社の営業がカバーするテリトリーが何ともざっくりしている。『九州』なのである。

端から端まで移動すれば400キロはある。高速を利用しても4時間以上かかる場所もある。

それまで事務用品の企画室にいた智雄は『営業』という仕事も知らなかったし、どういう頻度で運転や移動があるのかも入社研修があるまで把握していなかった。

もともと車の運転が好きでドライブなら何時間でも苦にならなかった。

運転手という職業に絞ると、乗りたくない車で長時間過ごさなければならぬが、この会社は『自家用車持ち込み』だった。それが応募した理由でもあった訳だが・・・

半年もしないうちに愛車とは別に中古で軽自動車を購入するはめになる。

一ヶ月で一〇〇〇〇キロ以上移動するガソリン代も原因の一つだが、愛車が痛んでいくのが耐えられなかったからだ。

愛車は昭和62年式いすゞジェミニ・イルムシャーターボ、コンパクトな4ドアセダンで、排気量はわずか1500cc車重は960キロで馬力は140PS（DOHCでもなくいわゆるドッカンターボというやつ）

免許を取得したのが24才。それまではバンドを組み音楽活動に精を出し、バイトで食いつないでいた。就職して最初に買った車がこのジェミニである。

以来丸7年この車に乗り続けた。軽い車体はスタートでマツダRX7を抑え込み、純正で装備されているハイパワースウィッチを押せば100キロからでも後頭部をレカロシートに叩きつけるような加速Gを味あわせてくれた。平成12年の今となっては製造されて14年目の古い車だが智雄は買い直す気などまったくなかった。

そして現在、中古のアルトワークスにもたれて缶コーヒーを持ちたばこをくわえながら地図を広げた。

燃費で考えるならばターボのないモデルにすべきだったが、『5速マニュアル』にこだわって探した結果、予算と車の程度の折り合いがつくものがこれしかなかった。

「げえっ……遠いなあ」

次の目的地と現在位置の確認を終えてから事務所に連絡をいれた。今日はそれで最後の訪問。終われば一目散に高速で福岡に帰宅する。

「ごめん下さい……」

「ああ、あんたが……。今度は買わんよ!! だいたい半年に一回は訪問指導とかゆつて……。毎回なんのかんのと買わせてからに。」

「いやぁ……。おかあさん?! 毎回? 前回もなにか買ったんですか?」

「クロレラ!! 二年分とかいうてから……」

「ああ、そうなんですな。……。で? 今回は健康チェックですけど、なにか最近気になる事とかありますか?」

「なんも!……。なんもないんやから今日はもうよかよ!」

「なんもない?!・・・本当に何にも気になる事ないんですか?」

「ああ!なんも!」

「・・・じゃあ、やっぱりクロレラ飲んでるからじゃないですか?」

「はあ?!」

「だってここに資料あるけど最初は夜寝付けない、トイレが近い、手足のしびれって・・・」

「確かに最近はやかあんばいやけど・・・」

「じゃあ続けていきましょう!・・・ね!」

「ああ、それは高い買い物なんやから飲むけど・・・」

「今は・・・何をどの位飲んでましたかね」

「これと、これ・・・一日2回」

「それで・・・ひざの痛みもあつたようですが、それはどうなってます?」

「ああひざな!ここは・・・まだ階段の辛いなあ」

「判りました!じゃ、こっちは日に一回で結構ですから、こっちを毎食前に一回!1日3回に変えましょう!」

「でもこっちはもうすぐ終わるからなあ・・・」

「ああ、そうですか・・・どうします？もうやめときましようか？」

「飲んだ方がいいんじゃない？」

「そりゃあ・・・飲まないより飲んだ方が・・・しょうがないなあ・・・内緒に出来ますか？」

「なにを？」

「僕らはねおかあさん、みんなこうやってお客さんのところに回って、これはこうやって飲むとか、こっちはこのぐらい飲んだ方が！ってやってるでしょ？実際に給料から買って飲んでるんですよ。」

「へーそうかい、・・・で？」

「だから今回は内緒にしてくれるなら、僕が社員価格で買ったものをまわしてあげます。2割引で。」

「そりゃありがたいが・・・あんた困らんかね？」

「なんとかしますよ！どうします？」

「じゃあ分けてもらおうかね。」

「判りました。じゃあ待って下さいね！」

そこまででいったん会話を辞めて智雄を携帯をもって車のところまでできた。

「あ、お疲れ様です。片山です。ええ古川さんの家です。OKです。2割引きで・・ハイ！ええ、ただしばらくはもう難しいでしょうね・・ハイわかりました。あ、はい代引きでお願いします。」

『ふーっ・・・』

溜息をひとしきりついた後再び玄関からはいる。

「おまたせ、おかあさん！大丈夫だよ、うまく言っただけからね」

「すまんね・・・じゃあ1年分もらえるかね？」

「ええっ？1年分ならこれだけど・・・」

手元の電卓をかちやかちやとはじく・・・

「いいの？割引っていつでも結構するけど・・・」

「いいよ！あんたがせっかく言ってくれとるんやから。現金でもいいかい？」

「・・・じゃあ、車の商品とってくるから待ってて」

慌てて、会社に電話して現金との変更、そして商品の追加をもうしでる。

もう辞めたい・・・それが最近の正直な気持ちだった。

商談が旨く行くと共に『まるで詐欺師だ』と自分自身を責める。しかし商品が売れない事にはガソリン代だけで給料が無くなる。歩合をすこしでも稼がないと借金も減っていかない。

帰りの高速でパーキングに依り電話をかける。

「ああ、聡君？おれ智雄！今日帰ったらいくから！店多そう？」

友達の経営するバーに連絡を入れた。

はじまりは・・・（後書き）

とりあえず見切り発車です。なんとかゆっくり（2週に一回）ペー
スで更新していきたいと思っています。

変化（前書き）

仕事をこなし、ただ毎日をごす智雄は、友人である聡の経営するバー『saint・wave』の常連、羽野亜希子とお近づきになるが・・・

変化

結局、博多に戻ったのは23:30過ぎだった。

（遅くなったなあ・・・明日もあるから聡の店も2時間くらいしか居れないな）

もともと智雄は酒をほとんど飲まなかった。若い頃から事あるごとに

「飲め！飲んで鍛えろ！」

などと上司や友達には言われてきたのだが、身体がアルコールを受け付けられないらしく、無理して飲んでも体調を崩すだけの事で、いつしか付き合いでもはつきり酒を断るようになっていた。

・・・結果、上司を袖にするけしからん部下として社内でも有名になり孤立していった。

専門学校卒、コネなし味方なし、入社5年目にして配属替えで企画室から倉庫番に飛ばされたのを機に転職したのはそうした経緯からだった。

部屋に戻ってからスーツを脱ぎ、着替えをしながらテレビをつける
と報道番組らしく、今日一日のニュースをダイジェストで流してい

た。

なにげなく聞き流していたのだが……気がつけばテレビの前に釘付けになっていた。

聞き覚えのある会社の社長が記者会見を開いていたからだ。

（株式会社オリオン健康！商品偽装の容疑で社内および役員宅に家宅搜索）

「……おいおい！……うちの会社じゃねえか……」

ニュースでは社長が机に頭をこすりつけ懸命にお詫びを述べていた。テロップに強引な商法など余罪も追及と書かれている。

「はっ……」

以前から商法（販売のやり方）については消費者センターなどから再三の注意を受けていた。

まあ、幹部連中は

「なんてことない！なんにも気にせずに売りまくれ！」

などと相手にもしていなかったが……その強硬策がどうやら裏目にでてしまったようだ。

明日からの事を思うと憂鬱な気分になるが、ひとまず自分のような末端の社員になにか容疑をかけられる事もあるまい。無理やりそう結論づけて智雄を1DKの部屋を出た。

「いらつしゃい……遅かったな。」

「ごめん……でも何とか……ほらぎりぎり今日。」

苦笑いで自分の腕時計を聡に見せるが、針は11:57を指していた。

「さっきまでエリカが優香ちゃんと待ってたのに……」

「まってたのはエリカちゃんだけだろ！優香が俺を待つわけがない。」

鹿屋エリカは聡の元妻。昨年離婚した。子供は一人、聡が実家で育てている。そして……
木之元優香は智雄の元妻で、なぜか二人はお互いが離婚して他人になってから交流を深め、聡とはよく顔を合わせ、この店もよく利用している。

しかし、優香は智雄を避けていて、離婚してから3年になるが一度も会った事はない。

（もっとも智雄のほうも、今更話すこともなく、煩わしいだけなので困る事も今のところない）

専門学校時代に合コンで知り合った優香とは、身体の相性もよく付き合って2年で結婚したが、優香の親とは折り合いが悪かった。優香の実家がちよつとした資産家で会社を経営しているというのは聞いてはいたが、跡継ぎの婿を欲しがっていたのは結婚するまで聞かされていなかった。

新婚旅行のハワイからついたその脚で優香の実家にいった。その時にいきなりこう切り出された。

「半年ぐらいしたらマンション引き払って、うちの名前に変える。仕事も辞めて、うちの稼業の研修にいけ」・・・と。

突然の申し出に、すぐ返事が出来ずにこまっていると

「自分が婿に入るのがいやならすぐ子供をつくってうちの籍にいれればいい」

その場で返事はしなかったが、あまりにも一方的な物言いにかかなり気分を害した智雄は、飲んでいた事もあり、黙って泊まりはしたが、翌朝、朝食もとらず優香もおいで自宅に帰ってしまった。

今思えば大人気ない行動であり、これが優香の親との決定的な亀裂

のはじまりでもあった。

それから智雄は向こうの実家にはほとんど顔もださず、妻にも避妊を続けて離婚までの3年間妊娠もさせなかった。せめてもの抵抗といえばますます子供っぽい行動である。

結局、相談もせずに仕事を辞めた事、子をなす気持ちがない事、そして車道楽での金使いの粗さなど、先方からすれば本人同士がぎくしゃくさえすれば離婚にもっていく理由はいくらでもあった。智雄自身、あまり家庭を顧みるタイプではなかったし、離婚の話がでる前あたりから優香にも男の影がちらつくようになっていた。一月ばかり形だけの協議が行われ、その後びっくりするほどあっさり離婚は成立する。

「まあ、そういうな！たまには会って顔みて話すくらいバチはあたらんだろう・・・」

「聡のそこはエリカちゃんといまでもいい関係だからいいけど・・・俺達は。」

「まあいいまあいい！またウオツカか？ズブロッカとボンベイサフアイヤがキンキンだけど」

「ボンベイサファイヤで」

表面に霜がふった綺麗な色のボトルから注がれる液体に視線をとめてぼーっとしていた智雄に聡が声をかける。

「疲れてんな・・・どうした？」

「いや別に・・・別にでもないか、さっきニュース見たらうちの社の役員が逮捕されたって・・・」

「えっ？なになんで？詐欺？恐喝か？」

「ひどいな、たしかに俺達は詐欺師みたいなやり方で年寄りから絞りとして給料貰ってるけど・・・今回は表示偽装らしいよ。多分瓶のラベルや梱包してる箱に、いかにも『医薬品』ですみたいにもっともらしい事書いてた部分か、原材料を偽装してたか・・・明日事務所にいつてみないと判んないね・・・」

「あら・・・お久し振り」

気がつけばカウンター二つ隣の席にショートボブの女性が座っている。

「マスターも片山さんも話に夢中なんだもの・・・驚かせた？」

慌てたのは智雄より聡の方だろう。まったく気がつかなかった。

「すみません・・・亜希子さん、いつもので？」

「うーん・・・今日は飲みたい気分だから・・・片山さんと同じの
で！ウオツカだよね！」

「かしこまりました。」

小柄といえば小柄、身長はおそらく・・・155センチくらいか、
年齢は、まったくわからない20代前半か、後半？イヤもしかして
30代なのか・・・

その不思議な女性は、羽野 亜希子。聡の店『Barsaint・
wave』の常連である。

まだ昼時などは汗ばむ、名ばかり秋という季節にワンピースにブー
ツという出で立ちは、季節の先取りをしないといけないアパレル関
係で働いている。という想像にいきつく。

何度か話した事はあるものの、聡は一人で飲みにくる女性客には極
力他の客（特に男性）には近寄らせない。智雄もその美しい彼女と
お近づきになりたくてもマスターのガードが固くて、まだなんの予
備知識も持てないでいた。

（だがそういう配慮があつて女性が気兼ねなく一人で飲みに来られ
るのも事実なので仕方がないとは思っている。）

「ねえ、今日は片山さんしかお客さんいないんだね・・・となり、いい？」

そう亜希子から提案されて智雄は聡を見る。 ” うんうん ” とうなづく聡をみてから

「どうぞどうぞ！亜希子さん」

笑顔で招き入れた。

（あ、頭いてーっ・・・飲みすぎたんだよな夕べ・・・俺、いつ帰ったんだっけ・・・??）

ガバツと起き上ったそこは、あきらかに知らない部屋だった。部屋のディスプレイやカーテンの色・・・確実に女性の部屋である。智

雄はベッドに寝ていた。しかも裸だ。

（思い出せ！思いだせ！俺）

昨夜一緒にいた女性といえば・・・亜希子しかない筈だ。

しかし・・・どこでどうやってこうなったのか・・・自分の身体を見てみる・・・これは・・・どうやら清廉潔白ではない様子だ。ベッドも一人ではなく二人で寝ていた形跡があり、また智雄の物ではない髪の毛が枕付近に何本が見える。

・・・・・・・・・・・・・・・・やっちゃったな、俺。

「あつ！よかった起きたのね？」

声のする方をみれば・・・目の置場に困る亜希子のバスタオル姿。どうやらシャワーを浴びていたようだ。（予想を上回るグラマラスさに目はくぎ付けなのだが）

「え、あ、・・・・・・・・あの・・・・・・・・」

「覚えてる？昨日の事。」

「いや・・・・・・・・なんていうか・・・・・・・・」

「嘘！？本当に覚えてないの？」

「う・うん、まだ頭も痛くて・・・あんま記憶ないみたい。」

「ま、いいや、朝あんま時間ないんだ！とりあえずトーストとコーヒーしかないけど食べて！夜は・・・と・も・お・さんはシャワーしてないから浴びてきたら？」

なぜ名前を強調して呼ぶのかもわからないし、意地の悪そうな、それでいて色っぽい含み笑いにおびえつつ、智雄はトーストをコーヒーで流しこみ、追い立てられるようにバスルームに飛び込んだ。

頭からシャワーを浴びながら、徐々に昨夜の行動を思い出していった。聡と3人で1時間ほど楽しく話して飲んでいたが、そのうち2組ほど他の客が入り、聡は忙しくなつて二人で話すことになった。それから・・・

「ねえ、もう出れる？」

いきなりバスルームのドアが開き亜希子が顔をのぞかせた。

「うわあツと」

慌てて前をかくすものの・・・

「なに恥ずかしがってるのよ！もうお互いさまでしょ！それより・・・今朝は会議でゆっくりしてられないの、せかして悪いんだけど・・・すぐに出たいんだけど・・・」

「ああ、わかった。もうでるよ。」

結局それから10分ほどで亜希子のマンションを出た。

「・・・ふふ、まだぼーっとしてるみたいね、せかしちゃったから埋め合わせに晩御飯一緒にしない？奢るから・・・覚えてない事で聞きたい事もあるでしょう？」

「ああ、そうだね・・・じゃ仕事おわりに連絡し合おうか？アドレスと番号聞いても？」

「そこまで忘れてると怒りをとおりこしてあきれちゃっわね・・・昨日交換したヨ！亜希子で入ってるはずだけど・・・」

「えっ・・・そうか・・・」

慌てて携帯のアドレスを確認する。確かに入ってる。

「じゃ！夜ね！」

「ああ！」

時計をみる。(いまから自宅に歩いて、着替えて会社につくのが・
・ぎりぎり間に合う)

・・・・一瞬、彼女の残り香が香ったきがした。上着を脱いで嗅いで
見た。

シヤネルN05・・・・自己主張が彼女らしい、と思いだし笑いをしな
がら歩く智雄だった。

変化（後書き）

なんかこういうシチュエーションで『記憶がない』という経験はありません。覚えてないふりをした事がありますが・・・でもいい女との情事を忘れるのは・・・もったいないですね。（笑）

渦中（前書き）

飲んだ勢いで身体の関係をもった（らしい）亜希子との関係は？
自分の働く会社も先行きが解らない・・・

渦中

会社に着いてから事務所に入ったが、想像していたような騒ぎなど何もなく・・・

まるで昨夜のニュースが夢だったのかと思うほど社員も全員そろっていた。

新聞社やテレビ局なんかが玄関前にごった返してるんじゃないかとも思っていたが、やはり騒がれているのは大阪の本社だけのようだ。（マスコミなんかいやしねえ・・・）

いつもと違ってる事といえば、社員のスケジュールに行先が書き込まれていない点だけだった

いつものように事務員が入れてくれたコーヒーを飲みながら自分のデスクにかけると、支店長がいきなり立って喋り出した。

「全員そろったようなので、我が社の現状をお話したいと思います。先日、報道で取り上げられましたので、みんな知っているとは思いますが・・・今回、商品の説明文についての『違反』がある！という事で、役員数名が身柄を拘束、そして家宅搜索を受けております。その他ではなにもおとがめは受けておりません。しかしながら各方面、特にお客様からの問い合わせが殺到しておりますので、本日より1週間は営業の諸君も定時まで電話対応をしていただきます。対応については、マニュアルを用意させて頂きましたので、こちらにそって各自で行ってください。以上」

確かに、いつになく社の電話が鳴り続けている。もともと事務員が3人、営業が10人、電話のアポ担当のスタッフが15人いるのだが・・・それだけでは足りないらしい、というよりも、こんな状況で訪問できる家などないというのが本音だろう。

色々と聞きたい事もあった智雄だが、とりあえずはマニュアルを手にとってみた。

『この度の報道に関して』とある。

1、報道に関しては、商品の説明文に不備があった為の警察介入であり、商品については何の心配もなく安心して使用を続けてもらう。
2、報道にあつた内容で商法など余罪があるなどは事実無痕であり、現在調査中である。
3、開封されたものに関しては出来ないが、無開封の商品の返品、また契約解除に関しては 速やかに社員をご自宅に派遣して行う。

（『速やかに社員を派遣』ねえ、ははあ・・・営業にクリーニングオフを止めさせるつもりか。）

内容を読んだだけで憂鬱な気分になった。

誰だって、こんな騒ぎになれば返品したいと思うに決まってる。これじゃますます信用を失うばかりだ・・・幹部連中はこの期に及んでまだ自分達がおかれた立場を理解してないようだ。

（この会社もいつまでいられるかわからなくなってきたなあ）

目の前の電話がけたたましく鳴り始める。智雄は覚悟を決めて電話に出た。

「ハイ！お電話ありがとうございます。オリオン健康です。ハイ、ハイ、その件に関しましては………」

昼の休憩は事務員と交代で回した。3まわり目の智雄が昼飯にありつけたのは午後2時をまわってからだった。

事務所をでて近くの定食屋に向かう。携帯を見るとメールが2つ着信が1度あった。

すべて亜希子からだった。

内容は今晚の待ち合わせ場所と、何が食べたいか連絡が欲しい、というものだった。

とんかつ定食を頼んでから亜希子にメールを返す。

『今日は内勤になりました。おそらく定時で帰れます。亜希子さん

は何時頃までお仕事なんですか？』

考えてみれば、智雄は亜希子の仕事はおろか、年齢も好みも何も知らない。にも拘わらず酒のせいで今朝の体たらく……。あのぐらいいい女であれば、酔った勢いではなくキッチンと口説き落として素面で抱きたかった。まさか昨日の今日でまたどうですか？などと誘うのも……。大人の男のする事ではない。

休憩は1時間ある。定食を食べ終えて、コーヒーでもとメニューをみたが、近くのコーヒーストップにいつて飲むほうがリーズナブルだし、味も幾分ましだろう。と思い立つて席を立ち清算をすませた。

智雄がドトールに入ってアイスラッテを飲み始めた時にメールが来た。

『5時？ずいぶん早いんだね、私は定時が8：00なの……。だから待ち合わせは大名で8：30ぐらいが都合がいいんだけど……。いかが？』

大名ならば『bar saint・wave』が都合がいいのだが、
……

聡に余計な勘ぐりは入れられたくない。どうしたもんかと思っていると、またメールが、

『saint・waveが行き辛いなら、もう一本奥の通りにある（table・spoons）でどう？あそこなら食事もそれなりだし、待ち合わせして移動してもいいし……。返信まっす。

亜希子』

気遣いが嬉しい。嫌味でもなくこちらの気持ちも考えてくれたメルに感心する智雄だった。

（こんな女と結婚したかった。ただのセフレって感覚でなく、向こうにその気があれば『付き合う』ってのもありかもしれない。）

『了解！その時間にtable・spoonsに行きます。』

もともと気になっていた女性だけに、俄然、彼女に興味がわいた。

とにかく、今日は彼女の事や昨夜の事をはっきりさせよう！

渦中（後書き）

とりあえず、出来る事から前に進むしかない様子です。
意外と早く更新できました。次回からは不定期と宣言しておきます。

唐突（前書き）

仕事はお先真つ暗、でも気になる女との出会い。

これって・・・運命なんかじゃないよね。

唐突

定時に仕事を終え（といっても電話対応していただけだが）

智雄は自宅に戻った。向こう1週間はこの作業が続くらしい……

部屋に入ると、溜まっているテレビ番組のビデオを見始める、なにしろ3時間つぶさなければ亜希子の指定する時間にはならない。

智雄はまるで高校生の頃、女の子を待っている時のような焦燥感によるものか、時間の流れがやたらと遅く感じていた。

やがて、あまり集中できないバラエティ番組を見ながら、智雄はソファで眠りこけていた。

目が覚めると辺りは暗い。テレビの灯りが眩しい。

（しまった！）

慌てて部屋の灯りをつけ時間を確認する。幸いにもまだ7時過ぎだった。

テレビもまだ大人が見るような番組もやってはおらず・・・シャワーをあびようかとも思ったが・・・もう季節は秋、冷え込んで風邪などひくのも馬鹿馬鹿しい。

部屋着からジーンズとＴシャツの重ね着、パーカーというかなりの軽装で部屋を出た。

コンビニに入り、雑誌をパラパラとめくるも興味が湧かず、結局ガムと缶コーヒーを買って部屋に戻る。コーヒーは自分で入れようかとも思ったが（豆はまだあった）出かける前に洗い物が増えるだけで気分が落ちるのでやめた。

コーヒーを飲み、煙草を2本吸い終えてもう一度着替える。一応、仕事帰りのOLとのデートの約束なので、少しタイトなレザーパンツに履きかえ、Ｔシャツにジャケットという出で立ちでブーツを合わせた。玄関の姿見で全体を確認（本当に久しぶりにこの鏡を使った。いかに女つけがない生活をしているか、智雄は実感する。）

歩きだして、伸びすぎた髪を向かい風にあおられながら（整髪料くらいつければよかったかな）

などと思いなおすが、わざわざセットしに戻るほど髪型にこだわるほうでもない。

table・spoonsについたのは20:15。待つのも待たせるのも嫌いな智雄としてはベストな時間だった。

コロナビールを注文してカウンターにかける。
ライムを瓶に押しこみ一口つけたところで

「おまたせしました。」

振り返ると白のストライプワンピースにヒールを合わせた亜希子がいた。

驚いた・・・思いっきり好みの女が目の前にいた。

「ワンピースだったんだ・・・朝はどんな服装だったか、全然覚えてなかった。」

「目の前で着替えましたけど？」

「・・・だよね・・・」

「なに見惚れてるの！おとなりいいですか？」

「・・・あっ・・・どうぞ！」

となりに座った亜希子は

「キール」

と注文した。バーテンダーはうなずいて作り始める。

「いやあ、びつくりしたな。そういうワンピースが好きでさ・・・
似合ってるよすごく。」

「ありがとう・・・でもこういうのが好きなんだって、昨夜も聞いたわよ！」

「・・・えっ？・・・そんな話までしたんだ。・・・でも、じゃあそれでわざわざ？」

そついいながら智雄は亜希子の服を指差した。

「そりゃそうよ！じゃなかったら着ないよ。これ先週着たばかりだし・・・ていうか・・・ほんとになんにも覚えてないんだね！？」

「いや、何にもって事もないけど・・・」

「でも部屋に上がってから、30分程寝てたと思ったらいつの間にか勝手にクローゼットに潜り込んで、服の駄目だし始めて・・・拳句にはあたしの下着までみて『こういうのが好き』って・・・」

「ちょ、ちよつと待って！？クローゼット？勝手に入って？？」

「そうだよ！！あたし、前から片山さんの事気になってたから、部屋に入れちゃったけど、もしかしてこの人危ない人だったのかなあ・・・ってちよつと後悔したんだから！」

「・・・それは・・・その、申し訳ない！」

智雄はその場で頭を下げた。

それから簡単な食事を注文して食事になった。

前菜の盛り合わせ、パスタ、フォカッチャ、どれも美味しく満足のいくものだった。

もともと智雄は食事の時は極端に無口になる。なので当然話が弾むわけもなく・・・二人してもくもくと食べた。

バーテンがエスプレッソを運んできた時に智雄は切り出した。昨夜の話の続きを聞かねばならない。

「・・・で、その先っていうか、その後の事は・・・」

「そこまで言わせる？」

「できれば・・・お願いします。」

素直に頭を下げる。

「ふふ・・・まあいいわ！それからもう一回飲もって言いだして・・・冷蔵庫からビールを出して、飲んでるうちに、仕事の事とか、音楽の事とか、あつそういえば、昔バンドやってたんだね聡さん！そして最後に別れた奥さんの事・・・その時に泣きだしちゃって・・・」

「うわー・・・我ながら最悪！よく追い出さなかったね。」

「まあ、そのあたりまでくるとね、なんだか・・・ごめん本人目の前にしてんだけど・・・可愛くなってきちゃって・・・うふふ。」

そっついながら亜希子はアルコールの為か、それ以外の理由かは判らないが顔を真赤に染めて言った。

「・・・で、酔っぱらってるのかな？と思ってたら、急に抱きしめられちゃって・・・あたしも酔ってたから。ていうとずるいよね・・・最初からもちろんそのつもりだった訳だし・・・」

「いやいやずるいとか、全然そんな事考えてないし・・・俺も亜希子さんの事ずっと気になってたから・・・」

「またまた！酔った勢いで抱いちゃった女に気を使わなくてもいいのよ！」

「勢い？！・・・そらまあ・・・結果としてそうかもしれないんだけど・・・実際どうなの？おれの事、今回の事で意識してくれたの？それとも幻滅した？」

「ううん。幻滅はしてない。」

「よかった。・・・で、亜希子さんは今、特別な人とかいないの？」

「それ酷いなあ・・・いるのに男連れ込んだじゃうんだ・・・あたし。」

「いやいやそうじゃなくて！・・・確認してるだけ・・・その、出来れば・・・」

いきなり携帯の着信音。
液晶を見ると・・・

「あちゃー・・・聡からだ。ちよつとごめん」

智雄は一旦店から出てかけ直した。

「おう！お疲れ、今日来る？」

「いや・・・今日は予定してなかったけど・・・」

「今どこ？あとで寄れない？」

「・・・なんか話でもあるの？」

「うーん、あるっちゃあるかな？」

なんとなく亜希子との事についてかな？と心配になった智雄はとりあえず行く事にした。

「いや実は、今近くで飲んでるから・・・ちょっと抜けてそつちいくわ!」

店に戻ると亜希子が清算を済ましていた。

「あれ?もう・・・帰るの?」

「聡さんからは?何だつて?」

「ああ、なんだか判らないんだけど・・・ちょっと寄つてだつて。」

「そつか・・・じゃ帰つたほうがいいでしょ?」

「えつと・・・まだ話したい事があるんだけど・・・明日も早い?」

「・・・わかつた。・・・じゃあ、部屋で待つてる。終わつたら来て!」

「いいの?」

「結構、恥ずかしい事いつてるんだから!何度もいわせないで!智雄さんが来るまで起きて待つてるから。早く来てね!」

「うん解つた。」

小難しい駆け引きなんかない。亜希子のストレートな物言いに・・・
智雄は

（ああ、俺この人に惚れてるな）
と実感する。

実はすぐそこで飲んだ・・・などと聡に言うのも気がひけるので
コンビニで10分ほどひまをつぶしてからsaint・waveに
入った。

「おお・・・来たか！座れ座れ。」

聡に示されたカウンター席を見て凍りついた。

別れた妻、木之元 優香がそこにいた。

唐突（後書き）

天災と前妻は忘れた頃にやってくるんでしょうか（笑）

回想（前書き）

亜希子とのデート中、聡から呼び出しをつけた智雄。
そこには別れてから一度も会った事もない優香が待っていた。

回想

固まっっている智雄に聡が声をかける。

「どした？はやく座れよ！そんなところに立ってられると商売のじやまなんだけどな」

「あつ・・・ごめん」

導かれるままに優香のとなりに座る。先に声をかけられる。

「久しぶり。元気そうね」

「・・・うん。まあね。」

「それだけ？もうちょっと愛想よくできないの？」

「なんの為に？・・・てか、用事があるって・・・お前？」

「お前ってごあいさつじゃない？せめて優香、とか名前でごんぐれなない？もう夫婦でもないんだし」

「・・・わかった。・・・で？なんか用ですか優香さん？」

「まあ、いいわ。特別用事って程じゃないんだけど。あたし・・・結婚するの。」

「・・・・・・・・・・で？」

「でって・・・一応、智はまだ一人みたいだから、報告しといたほうがいいかなって・・・」

「そんな報告とかでいちいち呼び出すな！だいたい電話でも済むだろう・・・」

「何回電話しても出ないじゃない！こっちはその度に心配してるんだから！」

「ほっとけ！関係ない赤の他人なんだから！」

「おい！今のはお前が悪い！ちゃんと優香ちゃんの話聞いてやれ！」

聡からそう言われて苛立ちながらも黙る智雄だった。

「仕事とかどうなの？うまくいつてるの？・・・痩せたみたいだけどこ飯食べてる？」

「・・・・・・・・・・」

「嫌われちゃったかな・・・」

「・・・・・・で？、どこのどんな奴と再婚するの？」

「気になるんだ、そういうの！」

「言いたくなければ別に……」

「ウソウソ、……離婚して付き合ってた相手とはね、すぐ切れたんだけど……その頃職場の年下の男の子から結構熱烈にラブコールされてね、その時は相手にしてなかったんだけど、さすがに一年以上ずっと言われてたら……ほだされちゃって……で、うちのお父さんも気に行つて、後をついででもいいって話になった訳！まあ、相手のご両親はあんまりいい顔してないんだけど。」

「よかったじゃん。婿養子と仕事の跡継ぎさえ決まればお養父さんはいい訳だから。」

「そんな風に言わないで！智に嫌な思いをさせたのは事実だけど……あたし達つてそれだけで別れた訳でもないんだから。」

「まあね。」

「言いたかったのはその事と、……智ひとりで住んでるんだって？」

「ああ……」

「お養母さん大事になさいよ！もう58才でしょ？なんで一緒に住んであげないの？」

優香は智雄の母親とは非常に仲がよかった。傍目からみたらそつちが本当の親子にみえた程。

「俺がどこにいらこうが！何時に帰ろうが俺の勝手だろ！？細かい事はっかりいいやつて！」

「だから、よそで浮気しようが、彼女作ろうが好きにしていっていつてんじゃない！ただ連絡してっいてっただけ！あたしとお養母さんもご飯つくって待つてるんだよ！」

「だったらもう作らなくていいよ！なければないで適当に食べるから。」

「智雄！！さっきから子供みたいな事はっかり言って、優香さんの気持ちを少しは考えてあげなさい！」

「二人そろってめんどくせえ・・・もういい！」

そう言うのと、帰ってきたばかりの智雄はまた車に乗って出掛けてし

まう。

ここ半年、夫婦仲はうまく言っていなかった。

優香の父親と不仲になってしまい、何とか仲直りをしてほしい、と願う優香だったが、智雄はそれが理解出来るほど大人ではなかった。何度も繰り返されるその話題からいつしか逃げるようになり、しまいは家に戻らない日さえあった。

その度にこんな喧嘩になってしまい、自分の大人気なさに気づきつつも素直に謝る事さえできない。夫婦生活も次第に無くなっていき、このままでは離婚という文字もちらつき始めていたが、そうなのでもいい……智雄はそう考えていた。……あくまでもその時は。

次第に夫婦の会話もなくなり、休みの日も智雄は行先も告げずに出かけてしまう事が多かった。

それでも優香は健気に食事の用意をして智雄の帰りを待っていた。

けれども智雄はそんな優香の気持ちを踏みにじるように無断外泊を繰り返し……

次第に優香の気持ちは乾いていった。

その事に智雄が気がついた頃はもう手遅れで、すでに優香には他の男の影が見え隠れしていた。

それから坂道を下るように『離婚』への手順を踏むだけだった。

「ねえ！聞いているの？お養母さんと暮らしてあげて！」

「・・・ああ、考えておくよ。」

「また！そんなこと言って・・・どうしてやさしくできないの？」

「・・・もう・・・ほつといてくれ！・・・とにかく結婚おめでとう。今度は幸せになれるといいな。」

「・・・あ、ありがとう。・・・あなたも、もっと自分やお養母さんを大事にしてね。」

さとしに手を振り、智雄はs a i n t・w a v eを後にした。

回想（後書き）

昔の事を思い出し、優香と別れた智雄・・・
亜希子の待つ部屋には？

本音（前書き）

元妻である優香の再婚話を聞き、興味なさそうに強がって一人
i n t ・ w a v e を出た智雄が会ったのは・・・

本音

s a i n t・w a v eから出た智雄だが、軽く沈んだ気持ちのまま
で、すぐに亜希子の待つマンションに向かう事は躊躇われた。

どうしたものかと考えながら大名から天神方面に歩いていると・・・

「あれ！？どうしたの？・・・一人？」

目の前に聡の元妻、鹿屋エリカが立っていた。

173センチと、どちらかといえば小柄な智雄とはあまり目線が変わらない。そのスラッとした立ち姿に人目をひく日本人離れた高い鼻と厚めの唇。その上どこことなく人懐っこそうなくりつとした瞳・・・とても子供を産んだ女性には見えない。

（あらためて見ると、本当に『美人』だよなあ・・・なんで別れたんだろ？聡のやつ）

・・・と、一瞬見惚れた智雄だったが、しかし質問に答えてない事に気がつき慌てて返事をする

「えっ？あ、うん・・・今s a i n t・w a v eから出てきたところ・・・エリカは？これからいくところ？」

「ええ。・・・じゃ・・・会ったんでしょ？」

「・・・ああ、うん。」

「ねえねえ、どう思った？元女房が再婚するって聞かされて。」

「別にどうもこうもないよ・・・ああ、『そうなんだ』って・・・ただそれだけ。」

その話題に触れられるのは何となく嫌だった。心から祝福できていない自分。

その内面をエリカに悟られまいと視線をそらしてそう答えた時・・・
・智雄は視界を遮られた。

口元に少しタバコの香り・・・”柔らかな唇が触れていた。”

「ちょ、ちょっと！！・・・なにしてるん・・・」

「ごめん。びつくりした？・・・だって智君・・・今にも泣きだしそうな顔してるから。可愛くって・・・つい。」

ぺろつと舌をだして笑う。

「・・・ついじゃねーよ！だいたい俺とエリカがこんな事したら聡だって、優香だって・・・」

「何にも言わないよ。……………だってもう恋人でも夫婦でもないんだよ!!」

「……………そりゃあ……………そうだけど。俺、エリカとそんな事するつもりないし……………」

「あら……………あたしはそうなってもいいと思ってるよ?」

「えっ?」

「ほら!……………今まんざらでもないって顔した。ふふ」

「なんだよ!!なにからかってるんだよ!!趣味わるいな!」

「ううん。からかってる訳じゃないの。智君とそうなっても好いて言ったのは本当!……………ただね、優香の気持ちもわかってあげて!あの娘は本当に智君が心配なの。聡の店に行き出したのだから、もともと智君の様子を聞きたかったからなんだよ!?解ってる?」

「そりゃないだろ。だって俺がいった時はいつも帰ってるし……………」

「

「それは智君が聡やあたしに『会いたくない』って言ってるのをきいてるからじゃないの?優香は本音を言えば、もう少し……………そう、例えば友達みたいに付き合ってたかっと思ったと思うよ!」

「そうかな?……………やっぱ俺はそう言う風には思えない。」

「もう!……………そうやって意地はって。『思えない』じゃないんでしょ『認めたくない』んじゃないの?」

「もういいよ！とにかく、優香の再婚の話は判ったから・・・」

「ホントはこのまま・・・二人つきりになれるといいんだろうけど・・・今日は優香と約束してるからなあ・・・せっかく智君に脈ありって解ったのに。うふふ。」

「ちよっ・・・脈とかないから！俺はエリ力をそんな目では見てないから！」

「むきになっちゃってまあ・・・いいわ。今日はそう言う事にしておいてあげる。」

「だから違うって！」

「また今度連絡するから。ちゃんと返事聞かせてね。・・・あたしは本気だから。・・・ね！」

そう一方的にいつてエリ力は *s a i n t ・ w a v e* に向かって歩いて行ってしまった。

「・・・ふっ・・・なんなんだよ！あいつ。」

エリ力にいいように翻弄されてしまい、少々疲れた智雄だった。しかも、エリ力の言うとおり、もともと『まんざら』でもないのは事実である。もっとも今まではそんな気持ちをおくびにも出さな

ったのだが・・・

亜希子との急接近で気持ちが傾いてなければ・・・どうなっていたんだろう。

不覚にも想像してしまう智雄だった。

本音（後書き）

『まんざら』でもない。こういう気持ちは男性だけなんだろうか？
筆者は男性なので・・・女性の心理は判りません。

流水（前書き）

やっとの思いでついた亜希子の部屋。
二人の関係に進展はあるのか・・・

流水

赤坂にある亜希子のマンションへは、歩いてせいぜい10分程度。

例によってコンビニで雑誌をパラパラめくって時間をつぶす。待たせているという意識は働くが頭の中を切り替えてからでないと、亜希子には逢えなかった。

優香の再婚、そして思いもよらなかったエリカからの『お誘い』とも取れる言葉。

いろんな事が渦巻いてまだ混乱していた。

メールの着信音が鳴る。

亜希子からだった。

「まだお話し中だね。起きて待ってるなんて言ったけど、気にし

なくていいからね、却って気を使わせそうだったから。やっぱりお風呂に入って寝て待ってるから、何時になっても起こしてね！これないならこれないで構わないからね。

亜希子」

メールを見て気持ちが和んだ。すぐにかけ直す。

「あ、もしもし、ご免ね待たせちゃって！もう終わったから。今からいっていい？」

形の良い乳房に右手を置いていた。その吸いつくような肌から手を放す事が出来ず、亜希子が柔らかな寝息を立て始めてからもずっとそのままだった。でも・・・ふと『眠るときに胸に重みがあると悪夢をみる』と何かで読んだのを思い出し、名残惜しくも手を引いた智雄だった。

正直、亜希子の部屋に入るまで、聡の店での事をなんと説明すればいいのか迷っていた。

しかし、意に介して亜希子は何も聞かなかった。恐らくはなにか感ずるものがあって、そっとしてくれているのかもしれないが、結果として、その大人の対応に智雄はほっとしていた。

まだすべてをさらけ出す程にはお互い（少なくとも智雄は）心を開いていないように思われた。

部屋に入って、亜希子は

「よかった、お風呂入る前で、あたし夜は結構長風呂だから・・・待たせたかもしれないもの」

そう言ってコーヒーを出してくれた。

そしてさっき食べた料理の話、自分の仕事の話などをしてくれた。やはり予想通り、彼女はアパレルのスーパーヴァイザーをしていて、自社ブランドの店舗を回って毎日忙しくしているようだった。

「そうそう、それから智雄さん、あたしの事あんまり知らないでしよう?」

「そうだね、実は何にも知らないかも・・・で、智雄さんって硬くない?」

「え・・・そうかな?なんて呼ばれたいの?今まではどうだった?」

「智くん・・・とか智って呼び捨てとか・・・いろいろ。亜希子さんは？」

「あたしも、色々かなあ・・・あ、智雄さんって今いくつ？」

「32才。」

「あ、そうなの！？じゃ智って呼び捨て決定。」

「え、なんで32だと呼び捨てなの？てか、亜希子さんは？いくつなの」

「まあ！女性に年齢聞くなんて失礼よ！」

「えゝ・・・失礼って・・・」

「・・・ふふ、う・そ・・・引かないでね！」

「・・・引くような年齢なの？」

「う・・・ん。じゃ自己紹介。改めまして、羽野亜希子36才です。子供はいないけど一度結婚しました。」

「・・・まじで？！！見えない、見えないよ36には！俺年下だとばかり・・・」

「ありがと。て訳だから、君は智。あたしは亜希子さんに決まり。」

「うん。それはいいんだけど・・・」

「なに？神妙な顔しちゃって。」

「いや・・・なんか改まって言うのも今更んだけど・・・」

「もう、だから？な・に・？」

「・・・俺達っていうか、亜希子さん。その、真剣にお付き合いが始まったって思っているのかな？こないだは酔った勢いみたいな部分もあったし、まだなにもそういう話してなかったし」

「あたしは・・・もちろんいいわよ。智雄さん。じゃなくて智は？
こんなおばさんでいいの？」

「そりゃ、文句は一切ありません。末永くよろしくお願いします。」

「改まりすぎよ！・・・ええ、ふつつか者ですが、こちらこそよろしく願います」

亜希子はいきなり三つ指ついて頭を下げた。

「え、え、いや・・・そのこちらこそ！..」

その場で土下座をする智雄。

「もう・・・なにやってんのよ。コーヒーさつさと飲んじゃって、
お風呂に入る前に片付けたいから。」

「あ、じゃ、じゃあもう帰ろうか？」

「えっ・・・これだけ待たせたのに？何にもしないで帰っちゃうんだ。ふっん・・・」

「泊まってもいいの？」

「だって、もう彼氏なんでしょ？あたしの。じゃあ泊まってっほしいかな。」

そう言つて悪戯っぽく笑う亜希子に智雄は欲情した。黙っていきなり抱き締め、唇を重ねる。

「うっん・・・せつかちなんだね・・・先にお風呂に入らない？」

抱きしめられた腕をすり抜けて亜希子は訴えるが・・・また抱きすくめられ・・・

「入らない！・・・実はもう我慢できそうにない。」

「・・・そうなんだ。あたしは二度目だけど・・・誰かさんは初めてみたいなものだしね。ふふふ」

顔を真赤にしながらも挑発する亜希子を力強く抱きあげてそのままベッドに運ぶ。

ベッド脇の時計をみると、もう3時を回っていた。

もう一度、亜希子の美しい寝顔を見て
女性のぬくもりを久し振りに感じながら・・・智雄は眠りについ
た。

流水（後書き）

サブタイトルは、今回の話の流れから、意外性が全然なかったもので、流れる水・・・と。

螺旋（前書き）

亜希子とやつと付き合う事になった智雄。久し振りに愛しい人のぬくもりでぐっすり眠れるもの・・・

螺旋

亜希子の部屋で迎える二度目の朝。

智雄が目を覚ますと、亜希子が覗きこんでいた。

「おはよう。早いわね・・・まだ6時だよ。」

「・・・おはよう。いつから起きてたの？」

「ついさっき。あんまり可愛い顔で眠ってるから、見てた。うふふ。」

「

その笑顔に癒されつつも、半身で起き上がり気味の亜希子の胸元は刺激が強すぎたようで・・・

男としての朝の生理現象も手伝い・・・またもや亜希子を抱きよせてしまう。

「ちよつと!？・・・昨日、2回したよね？たしか・・・」

「そうだったけど・・・もう一回だけ!」

「これから毎日こうなの!？」

「毎日?・・・ここに越してこいって事?」

「そういう意味じゃなくて・・・泊まりに来る度にこんなに激しいのかって事!」

「え?・・・気が進まないなら・・・うつ!」

「だれがそんな事いった？ただそれなら泊まりにくる時の用意があるって事！もうっ！こんなにして！！」

いきなり智雄自身を鷲掴みにして上下にこすりあげながら亜希子は言う。

「あ、う、うん……わかった。……あっ……」

そして亜希子は智雄から視線を外さずにそのままゆっくりと下腹部に顔を寄せていった。

「はうっ……」

生暖かいものに包みこまれて……智雄の下腹部はさらに硬く充血を増していった。

会社に出ていくと、もうすでにアポイントの係は総出で電話を受け

ていた。

（やつぱ、しばらくこうなんだろっなあ・・・）

智雄もデスクに腰掛けすぐに電話受けを始める。30分程経過して、営業まで全員が出勤してきた頃、支店長が声をかける。

「えっ・・・全員そろったようなので、営業の諸君は今受けている電話が終わり次第、会議室に入ってくれ。」

みんながみんな顔を見合わせた。

（いったい何だ？まだなにかあるのか？）

そんな不安がそれぞれの顔に出ている。いったいなにかあるというのか・・・

さらに15分程経過して、やっと全員が揃った。難しい顔をしている支店長が、やっと真一文字の口を開いた。

「えっ・・・先日からの件で本社も蜂の巣をつついたような騒ぎになっていきます。そこで全員に本社から通達があります。昨夜、本社にて経営陣による会議が行われました。そこで出た会社としての結論です。近々に弊社は事実上の『倒産』を致します。そこで、現存の在庫整理、そしてアフターサービスなどをする者を除いて、つまり営業職のみなさんには退職して頂く事になりました。」

一瞬全員が色めきだち、ざわめきが起き始めた。その時。

「質問があります！」

「ハイ、野口君」

「ずいぶんと簡単におつしゃいますが、いつ付けでのお話でしょうか？それから退職金、雇用保険など、最低限の保障はどうなってるんですか？」

「本社サイドの意向をそのままお伝えします。来月末付けです。保障に関しては、事務からの通達が届かなければ具体的な返事は出来ませんが、もちろん、有給も消化して頂きますので、実際には各自もう少し早く身体は空くと思いますが。当たり前の査定よりも多少色がつく事はお約束します。他には？」

智雄はとりあえず質問する事にした。

「ハイ」

「はい、片山くん。」

「他の会社への紹介などは・・・していただけないんでしょうか？」

「・・・今のところはお返事しかねます。それも併せて本社に聞いてみましょう。他には？」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・

何とか定時まで会社で過ごし、帰宅した智雄だったが・・・
なにもやる気が起きない。転職するつもりではいたが、まだなにも
活動していなかった。

ハローワークにいこうにも、平日に休みを取らねばならず・・・そ
れなら、ギリギリまで過ごして有給をまとめて貰ったほうがいいの
か・・・

まったく考えがまとまらなかった。

（ま、いいか！とりあえず一月あるし、何とかなる！）

亜希子に連絡しようかとも思ったが、二日間泊まっているし、このままずるずる同棲してしまうという事態は避けたい。亜希子にそういう甘えはしなくなかった。

休憩なのだろう。六時半頃亜希子よりメールが来た。

『今日は？来るの？・・・（催促じゃないからね！）来ないんだっ
たら、業者のお付き合いがあるからそっち優先するけど。 亜希
子』

いつもいつも亜希子のメールにはぐつとくる。まったく嫌味がなく
こちらを立てるような文章には感動すら覚える。

『了解！今日はおとなしく家で寝ます。（笑）』

『うん、判りました。それから明後日お休みです。明日は来てくだ
さい。待ってるから。 亜希子』

『はい！判りました。楽しみにしてます。』

やはり亜希子はすごい。少しメールしただけで気持ちが癒される。
不安な気持ちもどこかへ飛んで行ってしまった。（今日は聡のこ
に顔出しに行くか！）

亜希子の事もずーっと隠しておけるものでもないし、話の流れ次第
では、今日その事も話せるかもしれない・・・このままでは二人

してs a i n t・w a v eに行き辛くなってしまう。

20：00過ぎに店に入ると、週末でもないのにかなり忙しかった。不定期のバイトの女の子が入っているところから察するに・・・予約が入っていたのかもしれない。

「お疲れ！出直そうか？今日忙しそうだし・・・」

「気をつかうなよ！そのうち落ち着くだろうし、カウンターで待っていてくれ」

「ああ、判った。」

しかし、一向に客足は減らず・・・少し落ち着いた頃にカウンターごしに

「仕事はどうなったんだ？あれからおちついたのか？」

と、聞かれて

「ああ、実は、営業全員首切りになったよ。いまから職探した。」

「そりゃたいへんだなあ・・・」

と喋っただけで、22:00頃になって、智雄はあきらめて帰る事にした。

「悪いな、なんか待たせてしまつて・・・」

「いいよいいよ！あんまり暇でつぶれてしまつたら、寄る処がなく
なるからな！（笑）」

「お前、縁起でもない事言つなよ！」

「ごめんごめん・・・じゃまた」

「おお！ありがとう。」

部屋に戻る前に映画でも見ようかと、ビデオを借りにレンタルショップに入った。

少し酔いが回ってる事もあり、ああでもないこうでもないとい時間程うるついて適当に話題作を3本借りた。

ゆっくりと家路に向かつてる途中で携帯が鳴る。

着信はエリカからだった。少し警戒しながら電話をとる。

「あ、よかった、まだ起きてた？」

「ああ、どうした？」

「もう寝るところだった？」

「いや、いまビデオ屋からかえるところ」

「ならちようどよかった！智君、今から会えない？」

「え？、今日？今から？」

「うん、実はもうマンションの傍まで来てるんだ！今からだと・・・ロイヤルで待ってるから、出てきて。」

エリカが一人で智雄に用事がある事など今までなかった。昨日の今日だ、おそらくは断ったほうがいい予感はある・・・が、酒入ってる為か智雄はついついいい返事をしてしまう。

「判った。一回帰って借りたビデオおいてくるから・・・20分くらいでいく。」

螺旋（後書き）

エリカはいつたい何故こんな時間に会いたいのか？
安直な流れにはならない筈です。

予兆（前書き）

酔った勢いでエリカからの呼び出しに応じてしまった智雄。いった
い何の用なのか？それとも昨夜の『お誘い』の続きなのか・・・

予兆

一旦部屋に戻り、智雄はエリカと約束している薬院のロイヤルに向かった。

歩いて5分もあればつく道のりを、酔いが覚めて『後悔』に苛まれながら歩いていく。

（なんで行くなんで、返事したんだろう・・・俺、うまくかわす自信なんてないのに）

昨夜のエリカの行動は、まったく予想していなかった。いままでそんなそぶりも見せなかったのに・・・などと、済んでしまった事への反省。

そして、自分の心の隙とか美人に反応してしまう悪い癖が、まだ治ってなかったのか？さらに落ち込みながら目的地につくまで考えていた。

階段を登りきり、入口から中を覗くも、そこから見える禁煙席にエリカがいる筈もなく・・・

『いらっしやいませ！お一人様ですか？』

とおそらく社員であろう背の高い女性スタッフに声をかけられ、

「いや待ち合わせ」

と喫煙席の方向を指差しエスコートを振りきり歩いていった。

「あら、早かったわね。」

「お待たせ」

「そんなに待ってないよ、コーヒー頼んだけど・・・何か食べる？」

「・・・じゃあ・・・スミマセン!!」

『お決まりですか?』

「このデイズ・パンケーキのセット。コーヒーで」

『かしこまりました。パンケーキのセットをホットコーヒーですね。お飲物は先にお持ちしますか?』

「はい、この人と一緒に」

エリカをちらつと見る。

『かしこまりました。』

お決まりの接客を受けてから、智雄は切り出す。

「で、なんの用事？」

「あら、ずいぶんせっかちなのね。せつかく二人つきりなんだから・
・もう少し会話を楽しもうよ！」

「・・・いや、別に急いで帰る予定じゃあないんだけど、気になる
じゃない。」

そこへ先ほどのウェイトレスがコーヒーを運んできた。

『お待たせしました。』

二人ほとんど同時にコーヒーに口をつけたところで、

「じゃあ、ご要望の本題にはいるわね。」

「ああ、そうしてもらうと助かる。」

「ね、智君、うちの会社にこない？」

「ええっ？エリカって医療器具メーカーだったよね・・・て、俺が
会社辞めさせられるの知ってるの？・・・あつ、聡？」

「うん、そう。さっきちょうど智君と入れ替わりでs a i n t・w

aveにいったのね、それで智君の会社が大変だつて、聡から聞いて・・・だつてね、うちの会社ちょうど営業を募集してるのよ！」

「いやあ・・・俺元々営業畑つて訳じゃないし、医療器具なんて全然判らないよ。面接で落ちるのが関の山じゃない？」

「なに言ってるの？あたし、一応管理職だよ！人事にも顔利くし、受けるだけ受けてみなよ。」

あまり気のりしない話ではある・・・ではあるが、エリカがせっかく言ってくれてる話を無碍にもできないし、もし受ければ、今務めている会社よりはよっぽどネームバリューもある。
もしかしたらサラリーだつて跳ね上がるかもしれない・・・

「なあ、エリカ。その話考えさせてもらつても・・・」

「もちろんよ、一応人事にいつて枠は取つて貰つとくから。でも・・・金曜日には返事聞かせてね。」

「ああ、悪いな。」

なんだか変に警戒してきた自分が馬鹿みたいに思えた。こんなに心配してくれていたエリカに申し訳ない・・・そう反省した。

ホットした途端、腹が減っている事を自覚する。そこへまたあのウ

エイトレスがお待ちかねの皿を持ってやってきた。

やつときたパンケーキを美味しそうに頬張る智雄を、エリカはニコニコと見つめていた。

「まだそんな甘いもの好きなんだ。」

「悪い？」

「ううん。よくうちに遊びに来る時もケーキとか買ってきてたなあって思いだしただけ。」

「そうだったっけ・・・」

「そうだよ！聡は甘いもの全然ダメだから、あたしと洋介（二人の子供）と智君で全部食べたじゃない。」

まだ平穏だった頃の聡とエリカは、本当にいい夫婦だった。自分達とは違うと智雄は思っていたのだが・・・夫婦仲とは外からみてもわからないものだ。智雄と優香が離婚してから一年足らずで聡とエリカも離婚してしまった。智雄は自分の拠り所が無くなってしまったようで辛かったのをよく覚えている。

「・・・で？もう一つの話は？」

「もう一つって？・・・何だよ？」

「えゝ・・・忘れてる！！」

「だから何？・・・って、・・・えゝっ・・・あれ？あの話？」

（うわあゝ・・・来たよ・・・やっぱり。本気だったんだ、エリカ。）

「あの話以外に何の話があるのよ！」

「あれって・・・本気？」

「あたりまえでしょ！」

「いやだから・・・何でおれなんだよ！エリカだったらそれこそ選りどりみどりだろ？」

「あたしは、智君がいいっていつてるのに！もう、はぐらかさないで！智君、あたしの事きらいじゃないわよね！？」

「そりゃ嫌いなわけじゃない。何年も前から知ってるし・・・」

「そういう事は聞いてないの！女としてどうなの？タイプじゃないの？抱きたいって思わないの？」

「答えないとだめなの？その質問。」

「ええ！納得できないと帰らない。」

「ちょっと勘弁してよ・・・ぶっちゃけてエリカはいい女だよ。それもとびきりの。だから俺から見たって抱きたくない訳はないし、ただね・・・やっぱり駄目だよ。俺、聡や優香が気になるもん。」

「もう、いいわ。ついて来て」

そついうなり黙ってレジまでスタスタ歩いて行き、二人分の勘定を済ましている。

「いいよ、俺が出すから。」

「じゃあ、次を出して。」

「次って・・・どっか飲みに行くの？」

「いいから！黙ってついてくる！」

階段を下ると、

「じつちよ」

エリカは駐車場のほうに歩いていく。赤のボルボが止まっていた。

「おいおい、飲みに行くのに車でいくつもり・・・」

「もう、男がぐちぐち言わないの！」

これ以上刺激すると恐そうだったので、智雄は黙ってボルボの助手席に乗った。元々聡の愛車である。（離婚の時にエリカに取られたって言うてたよな・・・懐かしいなあ）

などと感傷に浸っていると・・・車は長浜のほうにドンドン入っていく。

「なあ・・・もしかして・・・ラーメン・・・」

エリカは返事どころかこちらを見ようともしない・・・完全に不機嫌のようだ。

しばらくすると

「着いたわ。降りて。」

そう言われて着いた場所は……

『チャペル・ココナッツ』と看板に大きく書かれており……入った事はないがここは……？

「ラブホ……？？」

予兆（後書き）

いきなり！？

ラブホって事は・・・やっぱりそうですよね。
他に用はないですよね。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

祝！！「ユウサク物語」1万ユニークアクセス！！
皆様のお陰ですありがとうございます。

棘（前書き）

エリカに連れてこられた場所はラブホテル！

少々強引なやり方に若干引きつつも・・・美女の誘いを断るのは至難の業・・・

棘

着いた場所はラブホテル。

（こりやまずい！ここまで強引だとは思わなかった。）

みればエリカは智雄の事など忘れてるかのように一人でロビーに向かってカツカツ歩いていく。

「おい・・・おいおい！エリカ、待てよ！」

仕方なく後を小走りに追いかけるが・・・エリカの歩く速度の速い事！！

エントランスは南国をイメージしたつくりでロビーまではくねくね階段をのぼったり橋を渡ったりと、入口をしらない智雄は迷いそうになりながらもたもととエリカを追いかける。
結局追いついた時には受付ロビーの中だった。

「まてつて・・・なあ、まず話し合おう。そんなに急いでどう・・・」

”カチャリッ”・・・エリカはすでに部屋へのカードキーを手にしていた。

「だから！なんでそんなに急いでこうする必要があるんだ？！」

「部屋まで一緒にきてくれたら教えてあげる。・・・どうする

？一人で歩いて帰る？」

すぐに『帰る！』と突っぱねるべきなのは判っている。しかしエリカの行動が常軌を逸しているようにも思える智雄は、このまま置いて帰る訳にもいかず。なんといって説得するか一生懸命考えていた。

”チーン”

なんと気がつけばエリカはエレベーターに乗っている。

「後は智君次第。部屋はSの401だから。覚悟が決まったら来て。・・・待ってる。」

「エリカ！」

”チーン”

（行っちゃったよ・・・どうするかな。）

結局・・・智雄はS-401と書かれた部屋の前にいた。
ルームサービス用であろうブザーを鳴らして待つ。

ゆっくりとドアが開く。智雄は中に入った。かなり広い部屋のように
だ。

エリカが振り向き、熱っぽい視線をかけてくる。

「さあ、どういふつもりか聞かせてもら・・・」

エリカはワンピースの背中のジッパーを下げてスルスルと脱ぎ始
める。目の前にはかなり色っぽいブラ、ショーツ、ガーターベルト
に包まれた一人の妖艶な美女が立っていた。

「・・・・・・・・」

何も言えず智雄は数秒間凝視していた。

「な、なんで？」

我に帰った智雄は慌てて目を逸らし、話合おうとする。・・・
が
エリカは智雄に抱きつき下着だけの身体を押しつけてくる。

「なんにも言わないで！抱いて！！、お願い。」

「そんなの無理だって！」

しかし、言葉とは裏腹に肩を掴んで引き離すつもり智雄の両手はしっかりとエリ力を抱き締めてしまう。

艶めかしく下から見上げるように智雄を見つめて……

「あたしって魅力ない？智君にとって……今この場だけでもいいの！あたしの事、愛して。」

そう言ってエリ力は吸いつくように智雄の唇をむさぼり始める。

ほんの5秒前まで智雄の頭の中には亜希子の事があり、目の前のとびつきり上質な誘惑と必死で戦っていた。……が、それもここまですでだった。

正直に言ってしまうと・・・エリカは最高だった。シャワーも浴びずにたっぷり2時間は愛し合った。特に、一度果ててしまった智雄を手と口だけで休憩なしで2度目のセックスに導いたあたりは凄すぎて声も出なかった。テクニクがずば抜けてるとか、そんな事ではない。

目線や唇の動きだけで相手の男をその気にさせてしまう。まるで魔性だと思う。

そして・・・これだけは避けないといけなかった事を、智雄は避ける事が出来なかった。

二度ともエリカはコンドームの着用を拒否し、そして智雄がいよいよ果てる。というタイミングになると、長い両足を智雄に巻きつけて逃がさなかった。

「大丈夫だから！中で！中で逝って！！」

快楽に負けてしまったのである。

二度目が終わった後、吸いだしたばかりの煙草を智雄から奪い取り、一口だけ吸って細く長く煙を吐き出したエリカ

「先にシャワーしてくるね、智君」

情事が交わされた安心感からか、ここに来た時のようなきつい表情はみじんもなく、まるで『聖母』のような柔らかい笑顔を魅せて、エリカは白い裸体に何もまとわず浴室に消えていった。

一人になって智雄は初めて後悔した。

聡や優香の顔がちらついたが……。そんな事よりも亜希子を裏切ってしまった自分を呪った。

交代でシャワーを浴びた後、智雄はエリカに向かって謝った。

「ごめん・・・エリカ。俺こんな事になってから言うのは卑怯なんだけど・・・今彼女がいるんだ。だから・・・今日の事は・・・これきりじゃあ・・・ダメかな。」

しばらく沈黙していたエリカだったが・・・

「・・・へっ・・・そうだったんだ。じゃあしょうがないよね・・・」

「

何でもないよ！という顔をしているエリカだが、一瞬だけした複雑な表情を・・・

智雄は見逃した。

「よかったあ・・・解ってくれて。その人に出逢ってなかったら・・・多分エリカの事・・・」

「いいわよ！そんな気を使わなくて。」

「本当だって、実際、俺エリカに昔っから魅力感じてたし。」

「そうなんだ・・・ありがとう。じゃあお願いがあるんだけど・・・」

「なに？改まって・・・俺に出来る事だったら」

「そんな困らせるような事じゃないから、心配しないで。」

「うん・・・で、何をすればいいの？」

「今夜だけ！今夜だけでいいから、あたしを恋人にして！朝まででいいから。」

まるで判決を待つ死刑囚のように、智雄の一挙手一投足をじっと見つめるエリカは・・・とても綺麗だった。

「・・・判った。じゃあ泊まっていこうか？」

ぱあつと花が咲いたように笑顔になるエリカ。少し涙ぐんでいるようにも見える。

「ありがとう。嬉しい！」

そういつて智雄に抱きつき、口、胸、肩、とキスの雨を降らせ始める。

「ちょ、ちよつとエリカ、」

と、身体をずらして避けようとする智雄は自分が男として反応してしまっている事をエリカに握りしめられて自覚した。

翌朝、エリカはいつも通りに振舞ってくれていた。

二人でモーニングサービスで朝食をとり、交代でシャワーを浴びた後、

「最後にやさしいキスして！」

とねだられて、その通りにギュッと抱きしめてゆっくりとフレンチキス。

「さあ、じゃ、マンションまで送っていくわね。」

満足したように一度ほほ笑むした後、あっさりそう言ういつものサバサバしたエリカに戻ったようだった。

連日の情事に若干の疲れを感じつつも、その日も仕事を無難にこなしてから家路についた。

昨夜のビデオを見ながら、部屋でコーヒーとジャンクフードでまったり過ごす。

前日と同じぐらいの時間に亜希子よりメールがあつた。

『こんばんは！昨日の約束覚えてる？』

『もちろん！何時頃いつたらいい？』

『今日は・・・買い物してから帰るから、21:00くらいがいいな。ご飯我慢できる？』

どうやら手料理を振舞ってくれるようだ。

智雄は罪悪感に押しつぶされそうになったが、メールだけで済んでほっとしていた。

約束の時間になり、亜希子の部屋に行くと、もう食事の用意が出来上がっていた。

鴨とクレソンを使った鍋だそうで・・・映画の『失楽園』で有名だとか何とか・・・

「泊まっていけるんでしょう？」

そっついながら缶ビールを持ってくる。

「もちろん！そのつもりだけど、亜希子さんはいいの？」

「なに遠慮してるの、あたしは智の彼女なんですよ？」

「うん。そっだよ！俺が彼氏で、亜希子さんが彼女かぁ・・・」

「そっだよ！これからは来たい時に来て！・・・これ、あげるから。」

亜希子からDonaldのキーホルダーにぶら下がった鍵を手渡された。

「・・・これって・・・合鍵だね。ありがとう！嬉しいよ。」

「下のセキュリティもこれ一本で空くからね！」

「うん解った。」

二人して美味しくご飯を食べた後、亜希子が入れてくれたコーヒ―を飲んでしばらくテレビを見てゆったり過ごす。

「お風呂に入って、着替えたら？」

と亜希子が男物のパジャマを渡す。

「えっ？これ・・・誰の？」

「もちろん智のよ！人が使った物出すわけないでしょ！今日買ってきたの。」

（なにからなにまで至れり尽くせり・・・本当にこの女と出逢えてよかった。）

「じゃあ、そうしようかな。」

そして、風呂に入った。

「下着の替えも置いとくね！」

ドア越しに亜希子の声。

あつたまつたところで下だけ（パンツとパジャマ）着て、亜希子のところに戻った。

洗い物をしている亜希子を後ろから抱き締める。

「亜希子さんも早く入ってきて！」

首元にキスしながらそういうと亜希子は向きなおして智雄の顔をみた。そして智雄の身体を見て・・・

「うん、そうする。先に寝てて。」

そついうとスルツと智雄をすり抜けていった。そして浴室のドアの音が”バタンツ”

（あれ？どうしたんだろう。）

何となくきになり、脱衣所までいった。なんと、脱衣所どころか浴室まで真っ暗で風呂に入っている！暗かったので消えていた灯りをつけてから声をかける。

「ねえ、どうしたの？こんなに真っ暗にして。」

「どうもしてない。・・・先に寝ててっていったでしょ！」

それきり黙ってしまった。どうも様子がおかしい。仕方なく脱衣場を後にしようと振り返った洗面の鏡を見て凍りついた。

「な！、なんで？！！！！！！」

智雄の両肩から胸にかけて・・・二か所づつ、併せて四か所の痣がみえた。

だれがどうみても左右対称のそれは・・・『キスマーク』だった。

棘（後書き）

タイトルの棘ですが・・・もちろんエリカという美しいバラの棘の事です。

そんな事より・・・かなりまずい状況かもしれませんね。

歪曲（前書き）

エリカなのか？

胸に残された痣の為に亜希子に知られてしまった！

どうすれば切り抜けられるのか？

歪曲

「……………どうして？」

真つ暗な浴室から亜希子の震える声がする。どうやら泣いているようだ。

質問の意味は十分すぎる程解っていたが、智雄は何も答える事が出来ないでいた。

「なんで？、どうして何にも言ってくれないの。あたしが勝手に勘違いしてるだけ？」

「……………」

「卑怯者！！何にも答えないなら……出てって！」

「……………まって。亜希子さんが風呂からあがったらキッチンと話すから……………」

「解った。じゃあ、リビングに戻ってて……………」

「ああ。」

正直、下手な嘘で逃げられる雰囲気ではなかった。ここまではずきりとした証拠がなければ、なんとか取り繕って、認めないつもりだった……………」

それにしても、なぜ？こんなものが・・・どう考えてもエリカの仕業に間違いなさそうだ。

でも・・・解ってくれたんじゃないかったのか？智雄は考えてみたものの・・・エリカが何を思ってたのか皆目見当もつかなかった。智雄はもう一度痣を確認してから、Ｔシャツとパジャマの上着を羽織った。

30分程して亜希子が出てきた。バスローブ姿で髪の毛にタオルを巻いている。

今現在、智雄が置かれてる立場が違ったら・・・迷わず抱きしめてしまいたい程魅力的な姿なのだが・・・目を真つ赤に染めた亜希子は智雄に向かっていつもの笑顔はもちろん向けてはくれなかった。

「・・・で、キッチンと話すって、何を？あたしが勘違いしてるって事？」

「いや・・・多分想像してる事で間違いないと思う・・・」

「じゃあ、聞きたくない！なんで？まだ付き合ってた日もたってないんだよ？それともあたし、騙されたの？」

「違う！許して貰えるとは思ってないけど、俺は本当に亜希子さんに出逢えて良かったと思ってるし、まだ短期間だけど、将来の事まで考えてる。今一番大切な人だと思ってる。それは信じてほしい。」

「じゃあ、尚更なんでこんな事になってるの？智が言ってる事ってすごく矛盾してる！」

「とにかく、最後まで話を聞いて欲しい。」

「解った・・・それで？何を話したいの。ちゃんと聞くから。最初っから、嘘なしでね。」

幾分覚悟が決まった亜希子は落ち着いて話を聞く気になったようだ。

.....

「それで？そのエリカさんとはどうしたい訳？智は二股かけようとしてたの？」

「違う。だから、事後承諾みたいにはなっただけど、実は彼女ができただけだからこれっきりにして欲しいって・・・それで解ってくれたと思ったんだ・・・」

「ふーん・・・智って・・・鈍いとは思ってたけど・・・それで納得

できる女がいる訳ないじゃない！本気にしたの？」

「うーん・・・でも元々友達の奥さんだった子だし、昔から知ってたから。」

「・・・で、判ってくれた筈のその人がどうしてあたしに挑戦状叩きつけてる訳？」

「挑戦状？」

「その胸のキスマーク!!」

「・・・あつ・・・」

「『・・・あつ・・・』って、まさか・・・うつかり付けちゃった。とか思ってた訳ないよね？」

「・・・う、うん・・・実はそうかな・・・と」

「そんな訳ないじゃない。もう!・・・ころっとだまされちゃって!どうせ『今日だけ』とか何とか甘えられて一緒に寝たんでしょ!」

智雄は自分の顔色が変わっていくのが解った。

「やっぱり!!とにかく、その人ともう一度会って話をつけて来なさい!それまではこの家は出入り禁止」

「えゝ・・・」

「当たり前!・・・今日も帰ってほしいところだけど・・・湯ざ

めして風邪でも引いたら困るから、泊めたげる。・・・で、も、何もしないわよ！」

「解った。明日にでも会って話してみるよ。」

亜希子のベッドは狭く、抱きあわずに二人入るのはかなり辛かったが・・・智雄は指一本触れずにまんじりとも出来ずに朝を迎えた。
(眠れなかったのは亜希子も同じだったが。)

次の朝もあまり話をするでもなく朝食を二人で食べて、智雄の出勤時間になった。

「じゃあ行ってくるよ。」

「ええ・・・いつてらっしゃい。とにかくいい加減な事したり嘘ついたりしないでね。たとえ向こうと付き合う事になったって話でも・・・ちゃんと報告して。」

「それはない。おれの気持ちは決まってるから。」

きっぱりと言い切ったが、亜希子の反応はドライであった。

「決まってるのにこういう事になってるんだからね！判ってる？」

「うつ．．．ああ、深く反省してる。とにかく待ってて。帰ってくるから。」

そして亜希子は何も言わずにドアを閉めたが．．．すぐにドアは開いた。

どうしたんだろう？と、智雄が中を覗きこむと

「忘れ物。」

そう言って亜希子はそっと口づけた。

「．．．．．」

ありがとう。」

なぜか智雄はそう答えた。

「馬鹿！早く行きなさい！！」

”ボタン” もう一度ドアが閉まる。

ある程度の自信はあったが、やはり亜希子は智雄を信用してくれた。しかも許そうとまで思ってくれているようだ。そう考えると、ますます自分の軽薄な行動が悔やまれる。

自宅に着替えに帰る途中に何度かエリカにメールしたり、電話をかけたりしたが一向に繋がらない……

とにかく会社には出かけた。

普通なら仕事が手につかないところなのだろうが……今回は何かしていないとおかしくなりそうだった。自己嫌悪と猜疑心に苛まれながら……智雄は必至で与えられた仕事をこなしていった。

別に定時にこだわる訳ではなかったが、事務の一人が欠勤しており、電話番号の当番が不在だった事により、営業職の中から智雄が当番に選ばれた。（予定がないのが一人だった。）

コーヒーをがぶ飲みしてひたすらかかってくる電話を受ける。社を出たのは20:00過ぎになってからだった。

コンビニによってしばらく雑誌の立ち読み、そしてビールとつまみ、弁当など見つくろい買って帰る。

玄関のドアを開けてすぐに違和感に気がつく。

心なしか、片付いているように見える。

・・・・・・・・

智雄はすぐに部屋に上がって灯りをつける。

[illegible]

誰もいないキッチンまでもが綺麗に片付けられており

118

歪曲（後書き）

すべて告白したからと言って、元にもどる訳では決していない。

ましてや、これから起きる試練に一人は耐える事が出来るのだろうか？

確信（前書き）

自宅に戻った智雄を待っていたのは・・・
無人の部屋に残された二人分の食事。いつたいだれが？

確信

「・・・なんだよ・・・これ。」

まだ温かいそれは・・・

さも今から二人で食べる為に作ったばかりのディナーとも呼ぶべき物で、ワインまで注いであった。食材を見る限り、冷蔵庫のあり合わせではありえない。智雄は料理が得意な方ではあるが、イタリアンパセリ、クレソン、フレッシュバジルなんて香草は買い置きしないし、だいたいそんな食材を使う料理なんて、わざわざ自分一人の為に作る訳もない・・・

前菜、パスタ、肉料理、サラダ。すべて二人分。メインの肉など湯気すら上っている。

いったい誰が、そして何のためについ先ほどまでであろう時間まで自分の部屋で料理を作っていたのか？しかも鍵は閉まっていた。

・・・という事は？この部屋の合鍵を持っている人間がいて、今日は智雄の為に、一緒に飯を食おうと、料理しにきたが、智雄が帰ってくる直前になんらかの理由で料理をそのままに慌てて帰った・・・と。

（ありえない。亜希子にすら、まだ合鍵を渡していないというのに・
・・）

恐る恐る、玄関に置いてあった使い捨て傘を両手に握りしめて、トイレ、風呂場、ベランダ、果てはクローゼットまで確認してから、智雄は改めて玄関の戸じまり《チェーンまで》の確認をしてソファーに腰を下ろした。

気持ち悪い。というより恐ろしさで、智雄は結局全部処分した。食べ物でも大丈夫な保障などどこにもないのだ。

亜希子に電話しようかとも思ったが、無用な心配をかけるのも好ましくはない。
結局それをせずに風呂に入った。

風呂で温まりながら冷静になりつつある頭で考えてみて・・・それでも警察を呼ぶ！という選択を何故しなかったのか・・・自問自答を繰り返した。

答はいたってシンプルである。まず、金目の物に手をつけた形跡がない事。その上で、智雄はこの事態について、多少たりとも目星がついたからだ。あくまでも仮定ではあるが・・・

鍵をどうやって開けたかは本人に聞いてみないと解らないが・・・今、智雄のまわりでこんな訳のわからない事をしそうな可能性があるのは一人だけ。
そう、エリカではないか？という結論にしか結び付かない。

風呂からあがり、エリカに連絡してみるが・・・やはり繋がらない。いったいどうなっているんだろう・・・

突然携帯が鳴る。

確認せずに通話ボタンを押してしまう。

「あら、はいねえ・・・」

「母さん?!」

「あんた帰ってこないから・・・掃除しといたよ。いくら男一人で、もう少し綺麗に・・・」

「・・・ああ、母さんだったんだ・・・いったい誰だろうってびっくりしたよ。」

なんの事はない・・・母なら合い鍵を持っている。ホットした智雄である。

「それにしても来るなら来るって電話しろよ!それももう年なんだから!こんな夜に帰るんなら待ってればよかったのに・・・」

「なに言ってるんだい、あたしは夕方ついて、掃除して暗くなる前

にすぐ帰ったよ。」

「夕方？・・・すぐって・・・じゃあこの食事の準備は？」

「訳分からない事いうねえ・・・料理なんてしてませんよ。」

「そ、そつか・・・あつ、ごめん！かあさん、ちょっと用事思
い出したから、またかけるわ！それと、掃除ありがとう。」

「はいはい。」

やはり・・・エリカなのだろうか・・・

また、携帯が鳴る。・・・亜希子だ。

「もしもし、どうしたの？」

「あのね・・・あんな事いったのに、いい辛いんだけど・・・」

「なにかあったの？！」

「うちに今からこれない？」

「なにか、あったんだね！」

「そんな・・・大した事でもないんだけど・・・」

「すぐに行くから！待ってて。」

20分程で亜希子のマンションについた。前日渡された合い鍵が以外にも役にたった。

「なにがあつたの？」

「これ……みて」

亜希子に携帯を手渡される。

メール画面。内容を読んで・・・ぞっとした。

『あなたに片山智雄は似合わない。はやくどっかに消えなさい』

『いい年をして、年下の男を追いかけてまわすなんて滑稽!』

泥棒！泥棒！泥棒！泥棒！……

☞ 死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ・・・・・☜

罵詈雑言が延々とつづられている。日付を見ると、全て今日送信されたもの。アドレスは見覚えがないものである。

「メールはこれだけなんだけど・・・」

亜希子は携帯を手に取り画面を切り替えた。

着信記録である。

非通知で100回以上着信されている。

「これって・・・やっぱり、エリカさんて人なのかなあ・・・
智、他に心当たりある？」

「・・・ない。寝てる間に携帯覗かれたのかもしれない。」

「アドレスを変えればいいんだけど・・・」

「ごめん！おれのせいで、まさかこんな迷惑かけるなんて・・・」

「ううん、その事はいいの。それより・・・エリカさんに会えたの？」

「いいや、連絡がぜんぜんつかないんだ。」

「はやく話し合ったほうがいいと思う。かなり危ない精神状態にな

つてるんじゃないかなあ。」

「今から自宅まで様子をみにいってこようと思うんだけど・・・大丈夫？」

「あたしは大丈夫だよ、いい？！いい加減な気持ちで接したらだめだよ。でも突き放さないであげて！」

「本当にごめん。じゃあ行ってくるけど・・・戸じまりだけはちゃんとして！チエーンもかけておいて！」

「・・・うん。解った。・・・もし、やっぱいいや。」

「うん？なに？」

「いい！いつてらっしゃい。」

「・・・あのさ、今晚中に解決できるかどうかは判らないけど・・・話がついたら、ここに帰ってきてもいい？、というより一緒に住みたいんだけど・・・どうかな？」

その時たしかに亜希子は笑顔になったが・・・

「考えとく！」

とだけ返事を返した。

智雄はその足で、エリカの自宅に向かった。

確信（後書き）

犯人はやはりエリカなのだろうか？

亜希子に脅迫めいたメールや着信を残したのは？

疑心（前書き）

いったい誰がこんな事？

エリカを探しまわる智雄は真相を見つける事が出来るのだろうか？

疑心

智雄は亜希子の部屋から出て、すぐにエリカの住むマンションに向かった。智雄の住む薬院から西鉄で一駅の平尾にあるマンションまで、タクシーで向かう。

玄関エントランスでセキュリティ越しにブザーを押すが返事はない。

しまらく繰り返すも埒が明かず、気は進まなかったが・・・saint・waveに電話する。聡ならなにか分かるかもしれない。もしかすると、こないだのエリカとの話を話さなければなくなるが・・・ここまで事態が悪化している以上それも避けては通れない事を覚悟した。

「聡？・・・俺、智雄だけど・・・」

「おお！噂をすれば・・・くくく、お前大変だな。」

「なにが？」

「あれ？俺が何にも知らないとも思ってるのか？」

きつと亜希子の事を言っているのだろう。

「ああ、亜希子さんの事なら今度行った時にでも話そうと・・・」

「それだけか？・・・その先の話もあるだろう？・・・エリカの事！」

「……そ、そうか、聞いたんだな……それも……悪い！今度話すから……それはそうと、お前エリカと連絡つかないか？」

「……つくもなにも、今来てるぞ！律儀にも振った男にまでお土産買ってるってよ！」

「！！！？そこにいるんだな！」

「ああ、なんか話があつたのか？」

「すぐにいくから、引きとめておいてくれ！」

「そりゃあいいけど、きたばっかだから、まだ帰らないと思うし……」

「とにかく行くから！」

智雄は駅まで小走りにタクシーを捕まえにでた。

10分ほどで大名のs a i n t・w a v eについた。

「おっ！来た来た！よっ色男！」

と、聡がちゃかすと、カウンターに座ってるエリカまで振り向いて叫ぶ！

「よ！色男！転職の返事は決まったのかい？・・・明日が期限だよん！」

「・・・エリカ。ちょっと二人で話があるんだけど。」

「・・・なあにい・・・やっぱり、あたしにしとく？！」

「なあ、まじめな話なんだ！」

「うふふ、冗談よ！でもあたしも本気だったんだけどな・・・」

「それについては謝るよ・・・でも、あんな事するの、もう止めてくれないか！？」

「あんな事？・・・どんな事よ！？」

「とぼけるなよ！亜希子さんに嫌がらせとか・・・俺の部屋に勝手に入ったりとか・・・」

「ちょ、ちょっと落ち着いて！なんの事？あたし本当に判らないん

「だけど？」

「……いやだから……」

「亜希子さんって……智君の彼女さんでしょ？ なにかあったの？」

「……お前……本当になにも心当たりないのか？」

「あたりまえでしょ！ だいたいそれいつの話？」

「今朝から……さつきまでに有った事なんだけど……」

「なにがあつたの？ 落ち着いて。」

「だから、今朝から亜希子さんの携帯に嫌がらせメールや無言電話がいつぱいあつて……お、まけに、おれが部屋に戻ると、誰かが入ってきた形跡があつて……食事の用意までしてあつて……」

「ふーん……智君はそれが全部あたしがやったと思つたんだ……」

「ごめん……でも他に考えられなかつたんだ……くどいようだけど……」

「ホントにしない！……第一、あたし今朝早くから下関に出張いってて今帰ったところよ！ ハイこれ智君の分。」

みれば、『フククッキー』なるお菓子である。（下関ではフグの水揚げが有名だが、地元では『フグ』ではなく『フク』と呼ばれている。）

「でも・・・俺が寝ている時にキスマークつけただろ？」

「・・・うん。それはわざと。ゴメン・・・でもそれくらいで別れちゃうような女なら、あたしと付き合ったほうが絶対いいって思ったから・・・どうなった？」

「どうなったじゃないよ・・・久し振りに冷や汗かいたよ。でも許して貰えそう。」

「そつか・・・やっぱりね、智君が惚れてる人だもんね。・・・」

（本当にエリカではないのか？）

「?!・・・ちよつとまで？エリカ！お前なんで亜希子さん、て名前で彼女だつて解ったんだ？」

「・・・ごめんなさい。それも謝っとく。じつは、智君がここのお客様さんと付き合いましたらいいって・・・聡から聞いて、あたし慌てちゃって・・・それで強引に誘ったんだけど・・・結局智君てば、馬鹿正直に話しちゃうんだもん・・・」

「それについては、俺も謝っとく。すまん智雄！」

聡がコーヒーを二杯持って二人の座る席にやってきていた。

「・・・なんで、亜希子さんとの事・・・」

「実はさ・・前々から亜希子さんにお前の事色々聞かれてて・・・物凄く好みだつて、で、あの日、三人だけで結構飲んだ日。あの時、亜希子さんがお前の事『お持ち帰りします』って言うもんだから・・・ついつい、エリカに面白くって喋っちゃったんだよ。そしたらこいつすんげー怒りだしちゃって・・・こいつもお前の事狙ってたのな（笑）」

「だいたい聡は無責任よ！亜希子さんって人が結構いい人だったから良かったけど・・・」

「ちょっと待って！・・・じゃあ、あの日から聡は判ってたんだ。」

「ああ、お前ここに来づらいつか思ってたんだろ。」

智雄は多少ふくれっ面で頷いた。

しかし、エリカの言うとおりだとすると・・・いや、そもそも今回の出来事はいったい誰が仕組んだ事なんだろう。

智雄は振りだしに戻ってしまった謎で頭がショートしそうになっていた。

「エリカが俺に謝らなきゃならない事はそれだけかい？」

ちよつと”ハッ”とした顔でエリカの表情が歪む。

「・・・ゴメン・・・もう一つ。」

「なんだよ？」

「あたし、キスマークだけで気付かなかつたら意味がないから・・・自分で電話かメールで存在教えてやろうかなって・・・智君が寝ている時に・・・」

「携帯開けて、アドレスを盗み見たんだな！」

「・・・うん。本当にごめんなさい。・・・でもメールも電話もしてないんだよ。」

「本当に本当だな？」

「本当よ！これだけは信じて！それに智君を送っていった日・・・すごく辛くて、結局この店で酔いつぶれてしまって、その時に聡に話聞いて貰ってて・・・何故か気がついたら携帯失くしちゃったし・・・」

「……で？」

「ああ、帰る時になって携帯がないっ！てわーわー騒ぎ出したもん

な、この酔っぱらいは。」

聡が横から補足した。

「それで？・・・そのまま携帯みつからないままなのか？」

二人揃ってうなづく。

では、件の脅迫メールはいつたいだれの仕業なのか？

智雄はさらに聡に聞いたです。

「他にお客さんとかいなかったのか？」

「ああ、いなかったよ。結構遅い時間だったし・・・あつ」

「なんだ、誰かいたのか？」

「いやあ・・・エリカの話聞いたのは俺だけじゃなくて・・・
優香もなんだ。」

「優香？優香も来てたのか？、それで？あいつも今度の事全部聞いたのか？」

「うん・・・前からあたしが智君の事で相談してたし・・・今度も励まして貰ってたんだ。」

もしかしたら・・・自分は最初から思い違いをしていたのかもしれない。

コーヒーを飲みながら、一連の出来事を整理する智雄だった。

智雄は母親に電話をかけた。

疑心（後書き）

賢明な読者の皆さんには・・・もう謎はとけたのではないでしょうか・・・最終話ちかいです。

結末（前書き）

いつたい誰がこんな事をしたのか?!
あなたは判りましたか？

結末

あれから3日が経っていた。智雄は会社に行き自主退職の意向を伝えた。しかし会社側は早期退職者をつのるつもりだったらしく、会社都合での退職、おまけに明らかに、『色』がついた退職金と有給休暇を貰い、一足早くの退社となった。

帰り道にビデオ屋により、借りていたビデオを返却して、その足でエリカの勤める会社に向かった。

想像はしていたが、やはり形ばかりの面接を済ませるだけだった。
(面接官の口からこっそり採用を伝えられた)
エリカにはそういう風には聞いていなかったが・・・彼女の口利きで採用が決まっていて、今日はただの顔みせ程度だったらしい。

ちよつと情けない気もするが背に腹は代えられない。

生きて行く為だ。

その二日前の夜。智雄はわざと17:30に帰宅した。

前日とまったく同じように食卓にはディナーの用意がしてあった。

「おかえりなさい。」

「……………ああ。ただいま」

違っていたのは、そこに食事の用意をした人物が待っていた事だけだった。

「今日は智の好きな煮込みハンバーグを作ってみたの。」

「優香。」

「だって……………昨日はせつかく作ったのに、帰ってこないだもん！
きっとあの女が悪いのよあいつが智をだましてるのね……………」

「やっぱり……………亜希子さんに無言電話や脅迫メールを送ったのも、お前だな？」

「ええ！そうよ。ちょっと何回か寝たぐらいで彼女面して！エリカの携帯ちよつと借りたら……………あの女のアドレスが入ってたから……………くつくつく、いい気味だわ。」

「優香！！！」

「どうしたの？大きい声出して。近所迷惑よ、さあ食べましょう。邪魔ものもないし・・・」

「お前・・・いつたい、何がしたいんだ？」

「なにって？・・・あたしはあなたの帰りを待ってご飯を食べさせて・・・」

「お前・・・もう結婚するんだよな！？たしか年下の男と。」

「いいのよ！あんなの！あたしは何とも思っでなかったのに、ちょっと寝てやったら勘違いして・・・勝手にお父さんに気に入られるようにして！・・・お父さんもお父さんよ！あんな見え透いたおべっかに喜んで勝手に結婚の話なんかしだして・・・」

「優香！どうしてだ？なんで？こんな事したんだ？」

「なんで？・・・なんで？・・・何ですってえ？！！！！」

優香の顔が正気を失う。充血していて視線の焦点があっていない！！

いきなりキッチンに走って包丁を握りしめて、智雄めがけてめっちゃくちやに振り回す！

「止めろ！落ち着くんだ優香！」

「もとはと言えば、あなたがいけないんじゃない！！あたしはあなたを愛してたのに！！他に女は作るし、それでもよかったのに！！それでも良かったのに！！、なんで？なんで？お父さんに謝

つてくれなかったのよオ！！！！智が頭下げてくれたら離婚しなくてよかったのに！！！！あたしは別れたくなくて・・・別れたくなんてなかったのよおお！！！！」

「もういい！わかったから、優香、包丁を渡せ！！」

「全然判つてないいいいい！！！！あたしがこんなに心配してるのに！！！！あんな！あんな！！年増の泥棒猫みたいなのに騙されてええ！！！！おまけに！おまけに！エリカまでえ！！！！エリカも抱いたんでしょ！！！！中で何度も出したのねえ！！！！あたしの中には一回も出さなかったくせにいい！！！！あたしのものなのよ！！！！あなたの子供はあたしが産むんだからああ！！！！あなたはあたしのものなのがいい！！！！なんで！なんでよオオ！！！！」

「！！！！うっ！！！！」

気がつけば切りつけられた智雄の左上腕部に傷がはいり、血が滴っていた。

「あたしのことオ！愛してくれないならあ！！！！智なんてえ！死ねばいいいい！！！！」

「止める！！！！」

開けておいた玄関から駆け込んできた聡が優香を後ろからはがいじめにした。

「なんでこんな事するんだよオ！優香ちゃん！」

「話してえ！！！！あたしの物にならない智なんてえ！！！！いなくなれば

いい!!」

二人がかりで優香から包丁をとりあげ、優香をタオルでしばり拘束する。

「はやく放しなさいよ!!殺してやる!殺してやるんだから!!」

暴れる優香を聡が見張る。智雄はシャツを裂いてタオルで縛り止血しながら玄関を開けに行った。

そこには、優香の両親が立っていた。

「お久し振りで。お養父さん。お養母さん。お呼び立てしてすみません。」

昨日の夜中、智雄は自分の母に電話をかけた。過去に智雄の部屋のカギを優香に貸した事がないか？という内容だった。ビンゴだった。智雄が引越してすぐに、

「忘れ物があるようだから、捜したい。」

と、優香から連絡があり、優香に全幅の信頼を寄せている母は二つ返事で貸したらしい。

智雄が今の仕事を始めてからなので、営業にでている時間に合い鍵を作っておく事など訳もなかったであろう。

よく考えてみれば、部屋の中の違和感を覚えたのは初めてではなかった。

いままでも、優香は部屋に侵入を繰り返していたのだろう。

裏がとれた時点で、智雄は聡に仮説をたてて話し、いざという時の為に外で控えてもらっていた。優香の両親にも朝から事情を話して呼んでいたのだった。何かしらの予感があったのか、母親は・・・「やつぱり・・・」と一言漏らしていた。

優香は離婚してから少しずつおかしくなっていたらしい。

母親だけは薄々感じていたようだった。しかし、父親には逆らえず、優香の味方にはなってやれなかった。そういいながら気の弱い母親は背中を震わせて泣いていた。

もともと親思いの優しい性格があだとなって、自分を殺して生きて

きてしまった。

智雄との離婚をお養父さんが決め、また今回の再婚が決まった時も本人は逆らわなかった。多分、その時すでに壊れかけていたのかもしれない。

おそらく、再婚話が出た時に少しでも智雄が優香の真意を問いただしていれば、こんな歪んだ結末は向かえなかったかもしれないが・・・すべて過ぎた事だった。

優香は結婚を取りやめて両親に連れられ、地方の病院に入院したらしい。

智雄もかすり傷だった為、警察にはもちろん連絡していない。

しばらくして様子が落ち着いたら、と養母から電話で聞かされて智雄は・・・

せっかく生まれてきた自分の人生。『誰かの為ではなく自分の為に生きる事を覚えて欲しい。』

智雄は優香にそう手紙を書いて送った。

さて、亜希子との事だが……結果からいうと白紙に戻ってしまい合い鍵も返した。

事件の次の日、エリカと亜希子と智雄、三人で話し合った。亜希子の声掛けによるものである。

エリカとのセックスで、二回も避妊なしで中に漏らしてしまった智雄だが、それを亜希子に言わされて（セックスのすべてを喋らされた。）エリカに亜希子は直接聞いた。安全日だったのかどうか？

答えはノーだった。（その時点で智雄は真っ青……）エリカは亜希子に気しないほしい！好きでそうして貰ったのだから、たとえ妊娠していても二人には迷惑をかけない！と最後まで言い張ったが、
・
・

亜希子はこう言った。

「赤ちゃん出来たら、この人と結婚してあげて！この人、父親にしてあげたいの！多分、父親にならないと大人になれない人だと思うの。あたしが産んであげたらいいんだけど・・・前の結婚でも出来なくて、それが原因で離婚しちゃったし・・・」

黙って聞いていたエリカが何か思いついたような顔でこう切り出した。

「じゃあ・・・こうしませんか？・・・あたしが妊娠していたら、あたしが智君貰いますから、その代り、妊娠してなかったら、亜希子さんが貰ってください。なんなら子供だけあたしが産んでもいいですから。」

「おいおい！・・・俺の意思は？」

そついった瞬間女性陣の二人が冷たい目で智雄を睨んだ。

「こないいい女が二人も候補に残ってるんだから！文句言わないの！」

「そつよ！だいたい自業自得でしょ？なに贅沢いつてるの？」

何もいえない智雄だった。

「お前・・・この年になってなかなかそんなにもてないぞ?! う
らやましいなあ・・・つぶ」

「聡! なに笑ってるんだよ! 人ごとだと思いやがつて!」

誰かの為ではなく、自分の為に生きていこう。そう思う智雄だっ
た。

結末（後書き）

一兎追うものは二兎を得ず。

・ まあもしかしたら、二人ともものに出来たのかもしれませんが・・・

今まで読んで頂きましてありがとうございます。
次回作でお会いしましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5426f/>

誰が為に

2010年10月9日18時32分発行